

アムスルだより

No.12 1995年 3月10日

Akajima Marine Science Laboratory 阿嘉島臨海研究所



〒901-3311 沖縄県島尻郡座間味村字阿嘉179

TEL:098-987-2304

FAX:098-987-2875

アムスルとは、阿嘉島臨海研究所のニックネームです



オニヒトデの話

オニヒトデといえば、サンゴを食い荒らす悪者として皆さんもよくご存知でしょう。表面に毒のあるたくさんのトゲを持った緑褐色のヒトデで、直径40~70cmに達します。夜行性で昼間はサンゴのかけなどに隠れていますが、夜になると表に出てきて、腹側の中央にある口から胃袋を出してサンゴを被い、ポリプを消化して食べます。食べられたサンゴは骨だけが白く残り、死んでしまいます。オニヒトデはここ20年来世界各地で大発生し、サンゴ礁に大きな被害を与えてきました。沖縄でも1970年代からおよそ10年で被害が沖縄全島に広まり、サンゴ礁はほぼ壊滅状態となりました。最近では慶良間をはじめ環境の良い海域では、サンゴの回復はかなり進んできています。オニヒトデを見ることも少なくなりましたが、一部の海域ではまだ多いようです。

オニヒトデには雄雌があります。今の時季から、水温の上昇とともに雌の体内で卵が成熟しはじめ、初夏に放精

放卵します。1匹の雌は、1シーズンに直径わずか0.2mmの卵をおよそ1千万個も産みます。水中で受精した卵は幼生となり、2~3週間浮遊した後、岩の上に着生して1mm足らずの稚ヒトデになります。稚ヒトデはまず、岩についているピンク色をしたサンゴモを食べ、やがて成長とともにサンゴを食べ始めます。そして、2~3年で直径20cm以上に成長し、産卵するようになるのです。

オニヒトデが異常に増える原因については、環境破壊による水質の悪化のため植物プランクトンが増え、これを餌とするオニヒトデの浮遊幼生がたくさん生き残ったためであるという人為説と、何百年かに一度起こる自然現象であるという自然発生説がありますがはっきりとはわかりません。

オニヒトデは切り裂いてもまた再生をするので、駆除するには陸に取り上げてしまわないといけません。水中で毒薬を注射する方法も試みられましたが他の生物への影響が心配されます。沖縄県では、買い上げなどによるオニヒトデの駆除がなされてきました。しかし、大集団でサンゴを食べているオニヒトデを見つけてやみくもに駆除した

ことが、間引きの効果となって、かえって被害を大きくしてしまった可能性も考えられます。かと言って、ダイビングなどで利用する美しいサンゴ礁の自然景観が壊されていくのを、だまっ
 ているわけにはいきません。守るべき海域を決めて定期的な調査を行い、小さいオニヒトデがたくさん見つかるなど、大発生のきざしが見えた時点で、これらのヒトデが産卵する前に駆除することが必要です。小さいオニヒトデは見つけにくいのですが、サンゴの食べられた痕が白く残るので、その裏側をさがせばよく見つけられます。このように白くなったサンゴがたくさん見られた時は、ぜひ研究所までお知らせ下さい。

最近では、オニヒトデのほかに、シロレイシガイダマシ類というサンゴを食べる巻貝の異常発生も、世界各地で問題になっています(以前にご紹介しました)。こうしたサンゴを食べる生物だけが悪者あつかいされているようですが、これらもれっきとしたサンゴ礁に暮らす生物の一員です。サンゴ礁の自然は、たくさんの生物の微妙なバランスによって保たれています。大切なのは、私たち人間がこのバランスをくずさないようにすることではないでしょうか。

阿嘉島の海より

-クジラの骨格標本-

寒い日が続いてますね。今年の冬は冷え込みがきびしく、阿嘉島の月平均気温は、ここ7年間の平均値より1月は1、2月は2低い値でした。しかし、水温はほぼ平年並みです。

さて、研究所では2月15日から、コビレゴンドウというクジラの全身骨格標本の展示を始めました。今の時季、慶良間海域のホエールウォッチングでよく見られるザトウクジラは体長15mにもなるヒゲクジラ(髭鯨)の仲間ですが、コビレゴンドウは体長4~5mに達する中型のハクジラ(齒鯨)の仲間です。沖縄ではヒートゥと呼ばれており、名護ではたくさん漁獲されていました。展示した骨格標本は、1988年にニシハマに腐って打ち上げられた死体を砂浜に埋めて、半年後に回収したものです。皆さんぜひ見に来て下さい。

